はるこし
坤

911.3
サ
坤

猿蓑集巻之五

鳶の羽も刷（カイツクロヒ）ぬはつしぐれ　去来
一ふき風の木の葉しづまる　芭蕉
股引の朝からぬるゝ川こえて　凡兆
たぬきをゝどす篠張の弓　史邦
まいら戸に蔦這かゝる宵の月　芭蕉
人にもくれず名物の梨　去来

かきなぐる墨絵おかしく秋暮て　邦

はきごころよきめりやすの足袋　兆

何事も無言の内はしづかなり　来

里見え初て午の貝ふく　蕉

ほつれたる去年のねござのしたゝるく　兆

芙蓉のはなのはら／＼とちる　邦

吸物は先出来されしすいぜんじ　蕉

三里あまりの道かゝえける　来

この春も盧同が男居なりにて　邦

さし木つきたる月の朧夜　兆

苔ながら花に並ぶる手水鉢　蕉

ひとり直りし今朝の腹だち　来

いちどきに二日の物も喰て置　兆

雪けにさむき嶋の北風　邦

火ともしに暮れば登る峯の寺　来

ほとゝぎす皆鳴仕舞たり　蕉

痩骨のまだ起直る力なき　邦

隣をかりて車引こむ　兆

うき人を枳殻垣よりくゞらせん　蕉

いまや別の刀さし出す　来

せはしげに櫛でかしらをかきちらし　兆

おもひ切たる死ぐるひ見よ　邦

青天に有明月の朝ぼらけ　来

湖水の秋乃比良のはつ霜　蕉

柴の戸や蕎麦ぬすまれて歌をよむ　邦

ぬのこ着習ふ風の夕ぐれ　兆

押合て寝ては又立つかりまくら　蕉

たゝらの雲乃まだ赤き空　来

一構鞦つくる窓のはな　兆

枇杷の古葉に木芽もえ立つ　邦

芭蕉 九
凡兆 九
史邦 九

市中ハ物のにほひや夏の月　凡兆
あつし〳〵と門〳〵の声　芭蕉
二番草取りも果さす穂に出て　去来
灰うちたゝくうるめ一枚　凡兆
此筋ハ銀も見しらす不自由さよ　蕉
たゞとひやうしに長き脇指　来

草村に蛙こはがる夕まぐれ　兆

蕗の芽とりに行燈ゆりけす　蕉

道心のおこりは花のつぼむ時　来

能登の七尾の冬は住うき　兆

魚の骨しはぶる迄の老を見て　蕉

待人入し小御門の鎰　来

立かゝり屏風を倒す女子共　兆

湯殿は竹の簀子侘しき　蕉

茴香の実を吹落す夕嵐　来

僧やゝさむく寺にかへるか　兆

さる引の猿と世を経る秋の月　蕉

年に一斗の地子はかる也　来

名

五六本生木つけたる潴（ミヅタマリ）　兆

足袋ふみよごす黒ぼこの道　蕉

追たてゝ早き御馬の刀持　来

でつちが荷ふ水こぼしたり　兆

戸障子もむしろかこひの売屋敷　蕉
てんじやうまもりいつか色づく　来
こそこそと草鞋を作る月夜ざし　兆
蚤をふるひに起し初秋　蕉
そのままにころび落たる升落　来
ゆがみて蓋のあはぬ半櫃　兆
草庵に暫く居ては打やぶり　蕉
いのち嬉しき撰集のさた　来

ウ
さまざまに品かはりたる恋をして　兆
浮世の果は皆小町なり　蕉
なに故ぞ粥すゝるにも涙ぐみ　来
御留主となれば広き板敷　兆
手のひらに虱這はする花のかげ　蕉
かすみうごかぬ昼のねむたさ　来

凡兆　十二

芭蕉　十二
去来　十二

灰汁桶の雫やみけりきりぎりす　凡兆
あぶらかすりて宵寝する秋　芭蕉
新畳敷ならしたる月かげに　野水
ならべて嬉し十のさかづき　去来
千代経べき物を様々子日して　芭蕉
鶯の音にたびら雪降る　凡兆

ウ
乗出して肱に餘る春の駒　来
摩耶か高根に雲のかゝれる　水
ゆふめしにかますご喰ハ風薫　兆
蛭の口處をかきて氣味よき　蕉
ものおもひけふハ忘て休む日に　水
迎せはしき殿よりのふみ　来
金鍔と人によばるゝ身のやすさ　蕉
あつ風呂ずきの宵々の月　兆
町内の秋も更行明やしき　来
何を見るにも露ばかり也　水
花とちる身ハ西念が衣着て　蕉
木曽の酢莖に春もくれつゝ　兆
名
かへるやら山陰伝ふ四十から　水
柴さす家のむねをからげる　来
冬空のあれに成たる北颪　兆
旅の馳走に有明しをく　蕉

すさまじき女の智恵もはかなくて　来
何おもひ草狼のなく　水
夕月夜岡の萱ねの御廟守る　蕉
人もわすれしあかそぶの水　兆
うそつきに自慢いはせて遊ぶらん　水
又も大事の鮓を取出す　来
堤より田の青やぎていさぎよき　兆
加茂のやしろハ能き社なり　蕉
物うりの尻声高く名乗すて　来
雨のやどりの無常迅速　水
昼ねぶる青鷺の身のたふとさよ　蕉
しよろしよろ水に藺のそよぐらん　兆
糸桜腹いつぱいに咲にけり　来
春は三月曙のそら　水

凡兆　九

芭蕉　九

野水　九

去来　九

餞乙州東武行　芭蕉

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁　芭蕉

かさあたらしき春の曙　乙州

雲雀なく小田に土持比なれや　珍碩

しとぎ祝ふて下されにけり　素男

片隅に虫歯かゝえて暮の月　乙州

二階の客はたゝれたるあき　蕉

放やるうつの跡ハ何ともせず　男
稲の葉延乃力なき風　碩
ほつしんの初にこゆる鈴鹿山　蕉
内蔵頭かと呼声ハたれ　州
卯の刻乃箕手に並ぶ小西方　碩
すみきる松のしづかなりけり　男
萩の札すゝきの札によみなして　州
雀かたよる百舌鳥の一声　智月
懐に手をあたゝむる秋の月　凡兆
汐さだまらぬ外の海づら　州
鑓の柄に立すがりたる花のくれ　去来
灰まきちらすからしなの跡　兆
名
春の日に仕舞てかへる経机　正秀
店屋物くふ供の手がはり　来
汗ぬぐひ端のしるしの紺の糸　半残
わかれせはしき鶏乃下　土芳

大膽よおもひくづれぬ戀をして　残
身ハぬれ紙の取所なき　芳
小刀乃蛤刃なる細工ども　残
棚よ火ともす大年の夜　園風
こゝろよきハ松よ寝も須广の浦　猿雛
もゝのお合せ若するかゝみね　残
此夜もうれぬをなる破扇　風
鷺池孫をせよく去りて月見る　雛

ウ
嗅蕣の隣ハちりき縁つゝき　芳
俤へハふほとゝ山の子顔　風
那なき花を知りひる今は盛　嵐蘭
うすき色かゝる米の割下駄　史邦
蕗よ又ことし此つまるて之　野水
雛の袂を染るまゝの色　羽紅

芭蕉　三

乙刕　五　土芳　三
珎碩　三　園風　三
素男　三　猿雖　二
智月　一　嵐蘭　一
凢兆　二　史邦　一
去来　二　野水　一
正秀　一　羽紅　一
半残　四

猿蓑集巻之六

幻住庵記　芭蕉艸

石山の奥岩間のうしろに山有
国分山と云そのかみ国分寺の名を
伝ふなるへし麓に細き流を渡
りて翠微に登る事三曲二百歩
にして八幡宮たゝせ給ふ神体
ハ弥陀の尊像とかや唯一の家にハ

甚忌なる事なるを両部光を和け
利益乃塵を同しうしたまふも
又貴し日比ハ人の詣さりけれハ
いとゝ神さひ物しつかなる傍に住
捨し草の戸ありよもき根笹軒
をかこみ屋ねもり壁落て狐狸
ふしとを得たり幻住菴と云あるし
の僧何かしハ勇士菅沼氏曲水子之

伯父になん侍りしを今ハ八年計
むかしに成て正に幻住老人の名を
のみ残せり予又市中を去る事
十年計にして五十年やゝちかき
身ハ蓑虫のみのを失ひ蝸牛
家を離て奥羽象潟の暑き日
に面をこかし高すなこあゆみ
くるしき北海の荒礒にきひすを

破らて今歳湖水の波に漂ふ鳰の
浮巣の流とゞまるべき芦の一本
の陰たのもしく軒端茨あらため
垣ね結添などして卯月の
初いとかりそめに入し山の、やがて出
じとさへおもひそみぬ。さすがに春
の名残も遠からず、つゝじ咲残り
山藤松に懸て時鳥しば〳〵過る

程宿かし鳥の便さへ有を木つゝき
のつゝくともいとはじなど
そゞろに興じて魂呉楚東
南に走り身ハ瀟湘洞庭に立つ
山ハ未申にそばだち人家よきほど
に隔り南薫峰よりおろし
北風海を浸して涼し日枝の山比良
の高根より辛崎の松は霞こめて城
有橋有釣たるゝ舟有笠とりにかよふ

木樵の斧の小田に早苗とる
哥蛍飛かふ夕やみの空に水鶏の扣
音美景物としてたらずと云事
なし中にも三上山は士峯の俤に
かよひて武蔵野の古き栖もおもひ
いでられ田上山に古人をかぞふ
さゝほが嶽千丈が峯袴腰といふ山有黒
津の里はいとくろうしげりて網代守

にぞとよみけん万葉集の姿なり
けりなを眺望くまなからむと後の
峯に這のぼり松の棚作藁の円座
を敷て猿の腰掛と名付彼海棠
に巣をいとなび主簿峯に庵を
結べる王翁徐佺が徒にはあらず唯睡
癖山民と成て孱顔に足をなげ
出し空山に虱を捫て座ス たま

し心まめなる時ハ谷の清水を
汲て自ら炊く とくとくの雫を侘て
一炉の備へいとかろし 昔住けん人の
殊に心高く住なし侍りて たくみ置
る物ずきもなし 持仏一間を隔て夜
の物おさむへき所なといさゝかしつら
へり さるを筑紫高良山の僧正ハ
加茂の甲斐何かしか厳子にて此たひ
洛にのほりいまそかりけるを ある人を
して額を乞 いとやすやすと筆を
染て 幻住庵の三字を送らる 依て
草庵の記念となしぬ すへて山居と
いひ旅寝と云 さる器たくはふへくも
なし 木曽の檜笠 越の菅蓑計
枕の上の柱に懸たり 昼ハ稀々とふら
ふ人々に心を動し あるハ宮守の翁

里のをのこ共入来りて猪の稲
くひあらし兎の豆畑にかよふ
我聞しらぬ農談日既に山の端に
かゝれば夜座静に月を待ては
影を伴ひ灯を取ては罔両に是非
をこらすかくいへばとてひたふるに
閑寂を好み山野に跡をかくさむと
にはあらずやゝ病身人に倦て世

をいとひし人に似たり倩年月の
移こし拙き身の科をおもふに
ある時は仕官懸命の地をうらやみ
一たびは佛籬祖室の扉に入
らむとせしもたよりなき風雲
に身をせめ花鳥に情を労して
暫く生涯のはかり事とさへなれば
終に無能無才にして此一筋につな

る樂天ハ五臓の神をやふり老杜ハ
痩たり賢愚文質のひとしから
さるもいつれか幻の栖ならすやと
おもひ捨てふしぬ

先たのむ椎の木も有夏木立

題芭蕉翁國分山
幻住庵記之後

何世無隱士以心隱爲賢
也何處無山川風景因人
義也間讀芭蕉翁幻住庵
記乃識其賢且知山川得
其人而益義矣可謂人与
山川共相得焉迺作鄙章
一篇歌之曰

琵湖南兮國分嶺

は[illegible]　曲水

こ川さわんの跡しつむや鵜川の上　野水

鶏もばらばら時か水鶏なく　去来

海士の子よ五月雨る姥や一しほ　凡兆

軒ちかき岩梨おるな猿のあし　千那

頸脛のやまもの家や夜のやま　球碩

贈紙帳

古杢鬱兮緑陰清
茅屋竹椽纔數間
内有佳人獨養生
瀟口錦繡輝山川
風景依稀入誹城
此地自古冨勝覧
今日因君尚益榮

元禄庚午仲秋日　震軒具州

几右日記

蝸の背中つんつくる樊籬かれ　曲水
大川さかんの跡志つるや七夕川の上　野水
鶏もちろく鳴子も鶏なく　去来
海をみよ五月雨ぬまや一とこと　元佐
軒ちかき宕梨みすれ稜のあし　千那
稲脛はやまあゝかや夕の下ま　珎碩

贈紙帳

杜子手紙よめばとぎれけり　野径

いけすまに一しほ路の風やまさりける　里東

蛍飛ぶ宵の上こそけしの露　乙刕

顔や蓮の中に秋のつき　膳所　怒誰

角やくし家にも孫しき寝　探志

五羽六羽菴らかまゐすいとこゑ　元志

来つゝにわりして明る水鶏かな　膳所　泥土

笠あふげ柿すゝしや風の色　史邦

月影や海を底見るすゝしさ　正秀

志つかさは雲の気流しけれ　云人　柳陰

涼しさや二らゝに来て椎か下　如行

訪よ留守まかり

椎の木をとへ蜂や蝉の声　膳所　朴水

同北下や浅妹雑に海涼し　美濃垂井　市隠

文よ云よす

揺所来や早苗のあけよ夕涼　半残

麦乃粉を出尽す　之道

一筋これや鳥羽田のこゝろ麦

書音

一葉入る山さへ今や藤よすゝ　長崎 魯町

夕立や橋本の奥此一志きり　及肩

異様猿猴掛

縄帯や田より山越くるゝかゝり　尚白

贈簑

志ら露のまろくあるみの染ぬ　北枝

木履めく侍ふ生しぬ蓼紅葉　木節

包紙ヨ書

縫よこす菜袋や萩の露　膳所 扇

稲のふかこれを佛ほ出盛し　智月

石山や切て果ても妹の風　羽紅

橋の輪やこれて鳴むしまふ　昌房

里ハいまタあけときそれあつき所　何処

啼やいとゞ塩にほこりのたまる道　越人

越人と同しく訪合て　等哉

蓮の実に供よ飛入菴の池

明年弥生尋旧菴　嵐蘭

春雨やあらしも果ず戸ぼそつゝ

同夏

涼しさや此庵をさへ住捨し　曽良

跋

猿蓑者芭蕉翁滑稽之首韻也非託彼山寺偸衣朝市頂冠笑只任心感物写興而已矣洛下逸人凡兆去来随翁遊学棋舘竹窓躙等凌節斯有歳属撰此集玩其無己自謂絶超孤脈白袋者也於是四方唫友憧々往

来或千里寄書ゝ中皆有佳句
日蘊月隆各程文章然有昆仲
騷士不集録者索居竄栖為難
通信且有旌倪婦人不琢磨者
兼言細語為喜同志雖無至其
域何棄其人乎哉昦分四庫作
六巻故不遑廣捜他家文林也
維時元禄四稔辛未仲冬余掛

錫於洛陽旅亭偶會兆来吟席
見需記此支題首尾卒援毫不
揣拙庸幾一蓑高張有補于詞
海渙人云

風狂野衲
文艸漢書
正竹書之

京寺町二条上ル丁
井筒屋庄兵衛板

第6512號 受入 36.3.14